

藤井公明 (ふじい きみあき)

明治45年 香川県高松市に生れる
昭和10年 京都大学文学部文学科卒業
昭和24年 香川大学助教授
昭和33年 香川大学教授
昭和50年 香川大学停年退職
現 在 高松短期大学教授

樋口一葉研究

昭和五十六年七月十日 初版印刷
昭和五十六年七月十五日 初版発行

定価 四八〇〇円

著者 藤井公明

発行者 及川篤二

印刷所 (株)第一印刷所

101 東京都千代田区猿楽町二一八—十三

(株) 桜楓社

(電話) 〇三—二九五—八七七—

(振替) 東京 六一—一八〇—二〇

樋口一葉研究

藤井 公明著

桜楓社

樋口一葉研究
目次

明治二十八年の一葉

一 『たけくらべ』(一)(二)(三).....	九
西鶴の影響 9 『雛鶏』から『たけくらべ』に 10	
二 「しのぶぐさ」の秘めごと.....	二
「しのぶぐさ」(1) 12 「しのぶぐさ」(2) 13 「しのぶぐさ」(3) 13	
「しのぶぐさ」(4) 14 「しのぶぐさ」(5) 14 「しのぶぐさ」(6) 15	
三 『たけくらべ』(四)(五)(六).....	一七
『美奈和集』の影響 17	
四 『たけくらべ』(七)(八).....	三三
五 『軒もる月』.....	三五
六 『ゆく雲』.....	三九
大橋乙羽の手紙 29 『ゆく雲』の内容について 33 原抱一庵の評 36	
七 一葉の家計と大橋時子.....	六六
樋口家の貧困 38 大橋時子の同情 40	
八 『ゆく雲』と『にぎりえ』の間.....	四四
九 『にぎりえ』.....	五一

十	『たけくらべ』(九)と『うつせみ』 『うつせみ』82	九
十一	『十三夜』	六
十二	『にぎりえ』の好評と波紋	六
十三	『たけくらべ』(十一) (十二)	七
十四	『たけくらべ』(十三) (十四)	七
十五	『わかれ道』と『この子』 『わかれ道』80 『この子』84	八〇
十六	『たけくらべ』終局 『たけくらべ』(十五) 86 『たけくらべ』(十六) 87	八五

明治二十九年の一葉

一	『われから』の成立をめぐって	九一
二	嶋田政子のこと 『十三年』88	九六
三	『われから』の評など	一〇六
四	『うらむらむき』と『あきあはせ』など	一一一

五 『通俗書簡文』（精魂をこめて）	二七
六 最後に	三六

一葉伝をめぐる二三の虚実

― 桃水事件 ―

一 につ記（明治二十五年四月五月）「追記」の成立について	三九
成立に関する諸家の意見 139	
「本文」の前半について 142	
「本文」の後半について 147	
「追記附記」について 150	
二 桃水事件をめぐる問題点	四五
証人達の話 156	
噂はどうして発生したか 159	
毒矢 162	
ニューフェイス 164	
三 感情の起伏	二七
歓喜と不安（三月） 171	
恋する女心（四月） 174	
五月の頃 175	
六月の頃 181	

偶感

一 父則義とその資産運用	二九
二 母 盲目的愛情	二九
三 不運だった兄虎之助	三〇
あとがき	三二

樋口一葉研究

明治二十八年の一葉

一 『たけくらべ』(一)(二)(三)

西鶴の影響

二十七年十月十八日の平田禿木の手紙は、『暗夜』の統稿の依頼であったが、その中に「御約束の鶴全集近きに持参いたすべく」と書いてあるから、一葉は間もなく、帝国文庫の西鶴全集上下二巻を読んだことになる。これは二十七年に出版されたが、出版後間もなく発売禁止になっていたものであった。

西鶴の写実的手法に感動したのか、十二月に書いた『大つごもり』は、『暗夜』とは違って、西鶴的発想にたっていた。いわゆる市井物であった。

『たけくらべ』の未定稿に、『雛鶏』がある。これは現在の『たけくらべ』(一)に相当する部分であるが、これなどは、『大つごもり』の余勢を借って書き始めたものであろうかと思われる。この時の一葉の頭にあった小説の世界は、現在の『たけくらべ』とは、かなりちがったもので、つまり吉原界限の貧民街や子供たちを、もっと写実的に、もっと市井物的に描くつもりではなかっただろうかと思うのである。その時は、もちろんこの小説の題名も、『雛鶏』であった。題名は、しばしばその小説の内容を暗示しているからである。

『雛鷄』から『たけくらべ』に

『雛鷄』の文章は、すばらしい美文だったので、発想がかわり、題名がかわっても、一葉は、子供たちの通う学校雛鳳舎を育英舎と変更したていで、そっくり『たけくらべ』(一)として通用したが、(二)には、美登利も正太も長吉も居ないで、信如と寮住居に華族さまを気取っている貸座敷の秘蔵息子のみが登場していたのである。

(二)では、千束神社のまつりを背景にした子供たちの喧嘩の場を書こうという発想が浮んだようである。子供たちの喧嘩の場ならば(一)から自然に湧き出た発想である。

(一)の子供たちの中から、長吉という乱暴者を作りだして、それを一方の旗頭にするのは自然であった。しかしその相手が貸座敷の秘蔵息子では、歌舞伎の世界ならいざ知らず一葉には想像できなかつたのである。

(二)で書いた私立育英社の子供以外から、新人として、たった一人の公立学校の少年を登場させることになった。それが田中屋の正太であった。そしてこの少年のモデルになったのは一葉が祭の日に見た、(四)にも描かれているかわいらしい美少年だったと言う。

しかし祭の日になった一目見たことがあるが、氏も素性もわからないこの美少年を、虚構の世界に登場させるまには、かなり推敲の時間がかかっただろうと思われる。

公立学校のたった一人の生徒では、正太が孤立してしまうので、彼のうしろには表町の若衆たちがついていて、正太ばかりをお客あつかいしたと長吉に嘆息させる。そして家に金あり、身に愛想があるので、誰一人憎むものなく、横町組の子供までも彼になびびていると書いてある。

かくして十六歳のがき大将である長吉も、末社にとりかこまれた十三歳の正太にかなわないと感じて、信如に加勢をたのむのである。

(二)に、實在の美少年正太を新人として登場させた時、一葉の構想にいささか艶なるものが加わったようである。そして(三)に、美少女美登利が登場するようになった時、この小説の題名も『たけくらべ』に変更したのである。

しかし(三)の美登利も、西鶴の強い影響を受けて登場するのである。

……色白に鼻筋とほりて、口もとは小さからねど締りたれば醜くならず、一つ一つに取たてゝは美人の鑑に遠けれど、物いふ声の細く清しき、人を見る目の愛敬あふれて、身のこなしの活々したるは快き物なり、(中略)朝湯の掃りに首筋白々と手拭さげたる立姿を、今三年の後に見たしと廓がへりの若者は申き、とある。

「快き物なり」と書いて、廓掃りの若い來の言葉で結んでいる。肉感的な少女であり、しかも男の目から見て妖しくなやましい少女である。西鶴から学んだ手法であり、このような少女は、かつて一葉小説には見当らなかった少女である。

こうして『たけくらべ』(一)(二)(三)を清書して、二十八年一月二十二日頃、「文学界」に送った。しかしここに注目しておかなければならないことがある。それは「貸座敷の秘蔵息子寮住居に華族さまを気取りて、ふさ付き帽子面もちゆたかに洋服かるく」と花々敷き」少年も、そのままにして送付したことである。つまり小説の進行につれて、やがてこの少年が登場してくる予定が、伏線的に残されていたのである。

大黒屋の美登利が、いかに大音寺前の少女仲間の女王となつて威張つていても、彼女の身分が、「今は寮のあづかりをして母は遊女の仕立物、父は小格子の書記」では、この華族さま気取りの少年とは、身分の上では天地の開きがあったのである。

この時、一葉が、西鶴風の写実小説を考えていたとすれば、はたしてこの小説はどんな風に展開したのであるか。

二十八年二月十三日夕に書いた手紙の中で、この三章までを読んだ時の平田禿木の感想がある。

……扱この春のたけくらべは、誠に誠におもしろく拝見致し、毎夜くりかへしてあく事を知らぬは、まさに松寿軒のひとつはさつぱりとせし御筆の跡とたどられ、如何しても都の花以来の御傑作と珍重罷在候。あのあとは是非共今月も御見せ下され度しきりに待ち焦れをり候。例の二十日すぎまでに本町まで御送り下され候へばよろしく御座候。(下略)

とある。

松寿軒は西鶴の別号である。吉原界限の子供たちの世界が写実的に書かれ、妖精のような少女美登利が、今後どんな行動をとるのか、空想は無限に拡がってゆくのである。

二 「しのぶぐさ」の秘めごと

一葉遺稿のなかに、「しのぶぐさ」と表記したものが数篇残っている。永遠に忘れることのできない追憶の資料と云うものであろうか。

「しのぶぐさ」(1)

これは、明治二十三年五月頃から九月末頃まで、つまり萩の舎内弟子時代の雑記であるが、その中に、父の死や兄の死などを素材にして書いた小説まがいの断片がある。これらは断片だが、この雑記を見ると、一葉にはさまさまの想い出がよみがえってくるのであろうか。

「しのぶぐさ」(2)

これは、二十五年六月一日から二十二日に及ぶ日記である。中島歌子の母堂の死、十日祭などがあり、その間に一葉と桃水の不思議な噂が、萩の舎舎中にとびみだれ、錯乱した一葉が、師の面前に出て、桃水との関係を断つと宣言した日々の日記である。後に表紙に「しのぶぐさ」と書き加え秘記として保存していたのであろうか。

「しのぶぐさ」(3)

これは、二十五年六月二十四日から八月二十三日までの日記である。全体としては普通の日記であるが部分的に桃水に関する記事がある。八月二十二日には検事に昇進して月俸五十円をもらうようになった渋谷三郎が尋ねて来ている。この頃の一葉の桃水に対する愛憎煩悶の心境は、別に四月から五月の日記の後の余白に書いた追記がある。それには、

ある時は厭ひある時はしたひよ所ながらもの語りきゝて胸とどろかしまのわたり文を見て涙にむせび心緒みだれ尽して迷夢いよ／＼闇かりしこと四十日にあまりぬ 七月の十二日に別れてより此かた一日も思ひ出さぬことなく忘るゝひま一時も非ざりし 今はた思へば是ぞ人生にかならず一度びは来るべき通り魔といふものゝ類ひ成けん 道にかんがみ良心に問へば更に／＼心やましきことなく思ひわづらふふし更になし 我徳この人の為にくもらんとして却りてみがゝれぬ いでやこれよりいよ／＼みがきて猶一大迷夢見破りてましと思ひ立しは八月の二十四日渋谷君に訪はれし翌日成けり

と結んでいる。しかしこの追記そのものについては、この四月から五月の日記の表紙裏に、

かまへて人にみすべきものならねど立かへり我むかしを思ふにあやふくも又ものぐるほしきこといと多なる
あやしうこと人みなば狂人の処為とやいふらむ

とも書いてある。

この六月二十四日から八月二十三日にいたる日記は前の追記の日々で第三者が読めば普通の日記である。しかし一葉にとつては、しのぶぐさが秘められていた日々だったのである。

「しのぶぐさ」(4)

これは、二十五年八月二十四日から九月三日に及ぶ日記である。これも前述した五月日記の追記につながるものである。九月一日には渋谷三郎の求婚の申出を断わった話が書かれていて、

今この人に我依らんか母君をはじめ妹も兄も亡き親の名まで辱かしめず家も美事に成立つべきながらそは一時の榮もとより富貴を願ふ身ならず 位階何事かあらん 母君に寧処を得せしめ妹に良配を与へて我れはやしなふ人なければ路頭にも伏さん 千家一鉢の食にはつかん 今にして此人に靡きしたがはん事なさじとぞ思ふ そは此人の憎くきならず はた我れ我まんの意地にも非らず 世の中のあだなる富貴榮与うれはしく捨てゝ小町の末我やりて見たく此心またいつ替るべきにや知らねど今日の心はかくぞある 又おのづから見比べる時ありやとてかくは記しつ 今日はいともうくて何事もなさずに日を暮しぬと結んでいる。

「しのぶぐさ」(5)

これは、二十六年四月十二日から二十二日までの日記であるが、十五日以後は雑記録風になっている。この頃の日記としては、別に四月七日から始まり五月一日に及ぶ蓬生日記がある。

両者を比較検討して見ると、一葉は四月十五日まで書いてきて、この日の記事が心をゆるがして気になったためだろうか、紙の関係で十二日以後を切り離して、それに「しのぶぐさ」と表紙書きを加えて、別の冊子にしたよう

である。

「しのぶぐさ」の二十二日の記は、随筆風に書いてあって、日附けはない。蓬生日記を参照することによって、これが二十二日に、秘かに桃水を見舞った時の記であることがわかる。

十五日の日記によると、早朝猿楽町に藤陰を訪い、帰路三崎町の桃水の店を尋ねると、彼は腫物ができて今は本郷の河村家で療養中とのことであった。萩の舎から帰宅後母に話して見舞にゆきたいと言ったが母が許さなかったこと。その時の一葉の悲しさと桃水に対する恋しさが書かれている。

二十二日は小石川の稽古にゆく途中、秘かに桃水を見舞った時のことが随筆風に書かれている。桃水が心から喜んで、毛せんを出させ紙をきらせて一葉に歌を書かせたことなどがある。

以上のようにたどってくると、「しのぶぐさ」と表記して特別に秘蔵した一連の冊子には、その時の深い深い一葉の心の秘密が封じこめられていたように思われる。しかも(2)から(5)までのものは、すべて桃水の想い出にかかわるものであった。

「しのぶぐさ」(6)

これは、二十八年一月一日から二月十七日頃までのものである。小説の構想になやまされるようになった一葉は、従来の日記をやめて新しい趣向の記録を残そうとしたようである。何かの事件があると、その事実を書いて、その感想を一首の歌で結ぶという趣向である。当然この記録は、最初から「しのぶぐさ」と表記する性質のもてはなかった。

それでは、何故にこの記録に「しのぶぐさ」と表記するようになったのであろうか。三日の記に、